



平成21年度情報処理軽井沢セミナー

# SSO推進における図書館員のコミットメント

---

国立情報学研究所  
学術基盤推進部 学術コンテンツ課  
阿藪品 治夫



## このコマの内容

- イントロ
- **Federation**参加のメリット
- **SSO**のデモ
- 図書館員がやることは何か
- 事例紹介
- ディスカッション



# イントロ

## 3つのキーワード

- ☑ 国際標準による認証方式の共通化

= Shibboleth (シボレス)の実装。

- ☑ 電子ジャーナルやDB毎の面倒なユーザ認証からの解放

= SSO (シングルサインオン)を実現。

とにかく  
これ!

- ☑ 利用機関と提供機関による連合体で共同運用

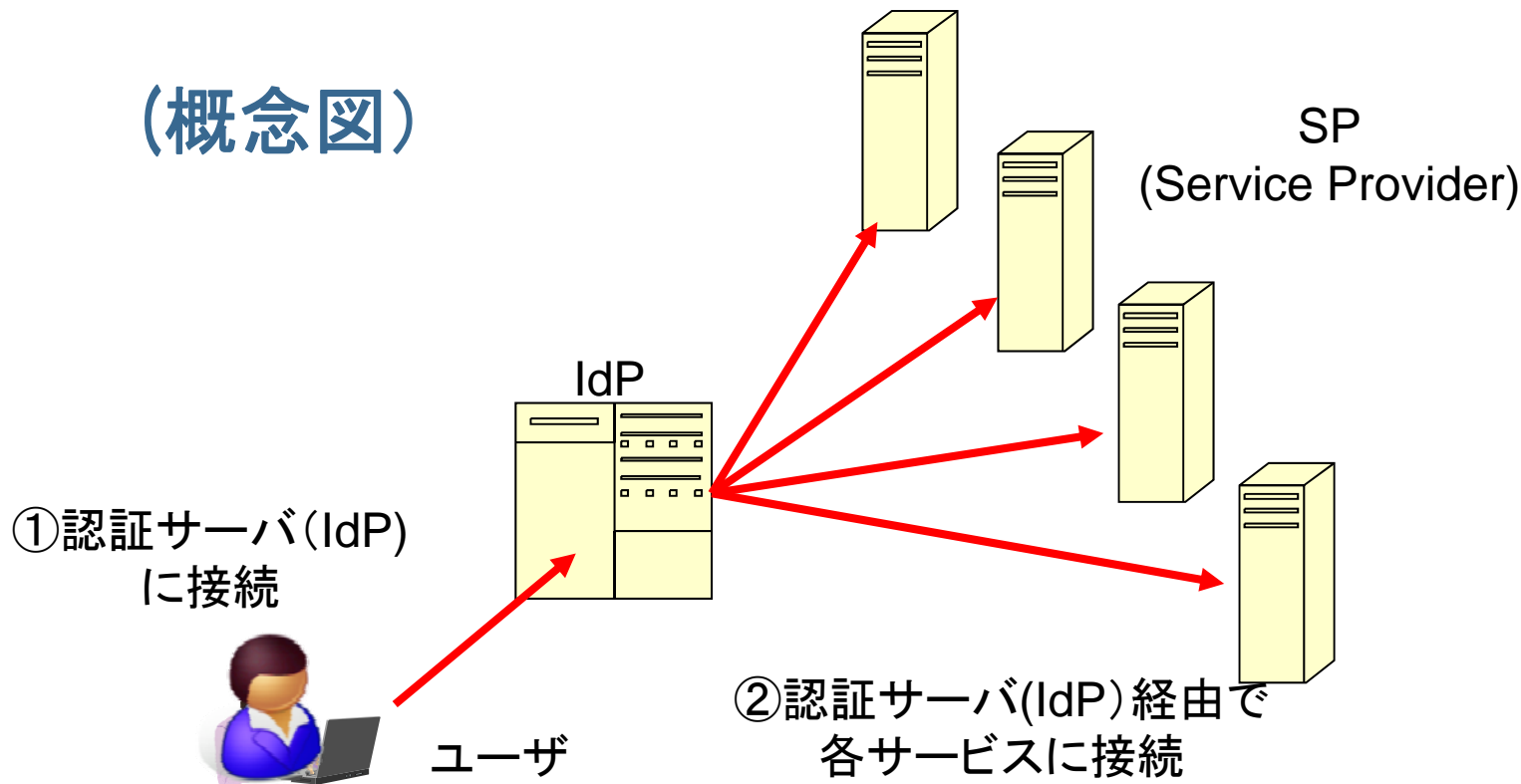
= フェデレーションの構築・運営。

# SSO(シングルサインオン)について

## シングルサインオン single sign-on

- 利用者が、1回のログイン手続きで、認証を必要とする複数のサービスを利用できるようにする仕組み
- 代わりにその1回のログイン手続きは十分セキュアにする

### (概念図)



# シングルサインオンの流れ

各大学の  
利用者

電子ジャーナル等

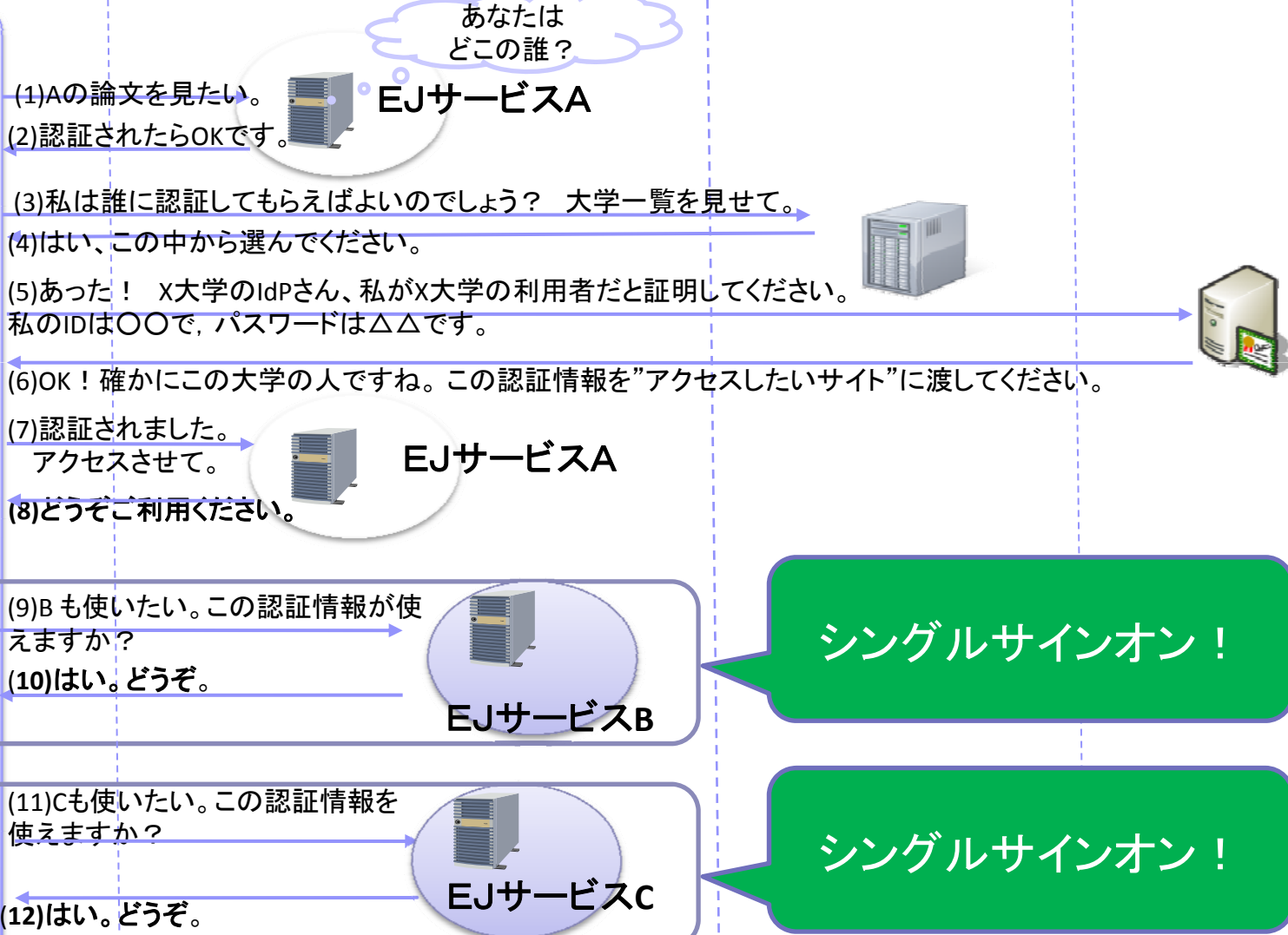
IdP一覧表示(DS)

所属する大学のIdP  
(Xdaigaku.ac.jp)

各大学の  
利用者



利用者



# 現実のEリソースを当てはめると

各大学の  
利用者

電子ジャーナル等

IdP一覧表示(DS)

所属する大学のIdP  
(Xdaigaku.ac.jp)

CiNiiの有料論文が見たい。

認証されたら見られます。

**CiNii**  
NII 論文情報ナビゲータ[サイニイ]

私のIDは〇〇で、パスワードは△△です。

OK！確かにこの大学の人ですね。

認証されました。

どうぞご利用ください。

**CiNii**  
NII 論文情報ナビゲータ[サイニイ]

利用者

Science Direct の論文も見たくなった。

認証済ですね。どうぞ。

**ScienceDirect**

RefWorksの文献リストを更新したくなった。

認証済ですね。どうぞ。

**RefWorks**

1度の認証で、  
2度、3度…、おいしい。

# Shibboleth対応を標榜するベンダ — 大手有名サービスは軒並み対応 —

Information Providers:	Learning Management Systems:	Other Systems:
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">American Chemical Society</a></li> <li>• <a href="#">ArtSTOR</a></li> <li>• <a href="#">Atypon</a></li> <li>• <a href="#">CSA</a></li> <li>• <a href="#">Digitalbrain PLC</a></li> <li>• <a href="#">EBSCO Publishing</a></li> <li>• <a href="#">Elsevier ScienceDirect</a></li> <li>• <a href="#">ExLibris</a></li> <li>• <a href="#">H.W. Wilson</a></li> <li>• <a href="#">JSTOR</a></li> <li>• <a href="#">The Literary Encyclopedia</a></li> <li>• <a href="#">Metapress</a></li> <li>• <a href="#">NSDL</a></li> <li>• <a href="#">OCLC</a></li> <li>• <a href="#">Ovid Technology</a></li> <li>• <a href="#">Project MUSE</a></li> <li>• <a href="#">Proquest Inform</a></li> <li>• <a href="#">Serials Solutions</a></li> <li>• <a href="#">SCRAN</a></li> <li>• <a href="#">Schweizerisch</a></li> <li>• <a href="#">Thomson Gale</a></li> <li>• <a href="#">Thomson Reuters</a></li> <li>• <a href="#">Useful Utilities</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Blackboard</a></li> <li>• <a href="#">CLIX</a></li> <li>• <a href="#">Frontier</a></li> <li>• <a href="#">ILIAS</a></li> <li>• <a href="#">INSTRUCT</a></li> <li>• <a href="#">Moodle</a></li> <li>• <a href="#">OLAT</a></li> <li>• <a href="#">Sakai</a></li> <li>• <a href="#">WebAssign</a></li> <li>• <a href="#">WebCT</a></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Bodington.org</a></li> <li>• <a href="#">Condor</a></li> <li>• <a href="#">Confluence Wiki</a></li> <li>• <a href="#">Darwin Streaming Server</a></li> <li>• <a href="#">Drupal</a></li> <li>• <a href="#">DSpace</a></li> <li>• <a href="#">eAcademy</a></li> <li>• <a href="#">Fedora Repository</a></li> <li>• <a href="#">Google Apps/Email</a></li> <li>• <a href="#">GridSphere</a></li> <li>• <a href="#">GridShib</a></li> <li>• <a href="#">Higher Markets</a></li> <li>• <a href="#">Horde</a></li> <li>• <a href="#">et</a></li> <li>• <a href="#">mail</a></li> <li>• <a href="#">share</a></li> <li>• <a href="#">a Wiki</a></li> <li>• <a href="#">isoft</a></li> <li>• <a href="#">oxy</a></li> <li>• <a href="#">ter</a></li> <li>• <a href="#">AA</a></li> <li>• <a href="#">epoint® from Microsoft</a></li> <li>• <a href="#">PA</a></li> <li>• <a href="#">licity</a></li> <li>• <a href="#">ln</a></li> <li>• <a href="#">i</a></li> <li>• <a href="#">al</a></li> <li>• <a href="#">WordPress</a></li> <li>• <a href="#">Zope + Plone\</a></li> </ul>

**学術認証フェデレーション参加ベンダ (H21.7現在)**  
 Elsevier(SCOPUS, ScienceDirect)  
 Springer(LINK), LWW/Ovid, EBSCO,  
 Thomson(WoK), RefWorks, CUP,  
 CiNii

\* “<https://spaces.internet2.edu/pages/viewpage.action?pageId=11484#ShibEnabled-nsdl>より引用





# ユーザに必要な物はたった2つ

☑ インターネットが使える端末

☑ 1種類の自分固有のID/パスワード

を忘れないこと



# きっと皆がHappy

- ☑ ユーザはEリソースが使いやすくなって  
**Happy。**
- ☑ 図書館は多くのユーザに契約コンテンツが使われて  
**Happy。**
- ☑ ベンダは、PRにもなって、きっと契約も維持できて  
**Happy。**





# Federation参加 のメリット

# IdP側 (大学) のメリット


- 情報セキュリティ基準への対応
  - コンプライアンス遵守
  - 個人情報保護などへの対応
- 個人利用者へのきめ細かなサービス実現
- シームレスなアクセス管理システム統合
- 学内・外サービスの双方に共通にアクセス可
- ID管理など運用管理業務, ユーザサポート業務の軽減

# SP側 (コンテンツプロバイダ等) のメリット

- ID管理, ユーザ情報管理からの解放
  - 認証は各機関のIdP が実施
  - コミュニティや組織単位で認可できる
- ユーザサポート業務の軽減
- 情報セキュリティ基準への対応
  - コンプライアンス関連の負担を軽減
  - 個人情報保護対策を軽減
- ライセンス条件にそった適正な利用の実現
- アカウト一本化で管理負担を軽減
- 集中管理でアサーション管理負担を軽減

# サービス利用者(エンドユーザ)のメリット

- 個人情報<sup>の</sup>露出機会を大幅に軽減
- 個人情報<sup>の</sup>保存場所が所属機関内で完結  
外部流出のリスクを軽減
- マイページ等のパーソナライズ機能が充実
- 記憶すべきパスワードを減らせる



# SSOのデモ



Broadcast Yourself™

upki

検索

YouTube モバイル  
こちらをクリック



ホーム 動画 チャンネル

# UPKIシンポジウム2009 シボレスデモ デモ版



UPKIシンポジウム2009で行った阿蘇品治夫氏の講演「認証 基盤を活用したコンテンツサービスの展開」の後半部分のデモです。日本で初めてシボレスによる認証をデモンストレーションした歴史的な講演です。

UPKIシンポジウム2009  
認証基盤を活用したコンテンツサービスの展開 デモ版

0:06 / 9:48

☆☆☆☆☆ 0 件の評価

再生回数 79 回

<http://www.youtube.com/watch?v=m6SehSUG7Go>







# 図書館員が やることは何か

# Eリソース利用の開始まで

## 準備

- ・ IdP立上げ
- ・ 運用フェデレーションへの参加

## ベンダに 申請

- ・ Shibbolethによる利用をベンダに申請  
(申請内容, 方式は各社ともほぼ共通)

## 利用

- ・ 学内周知
- ・ 利用開始



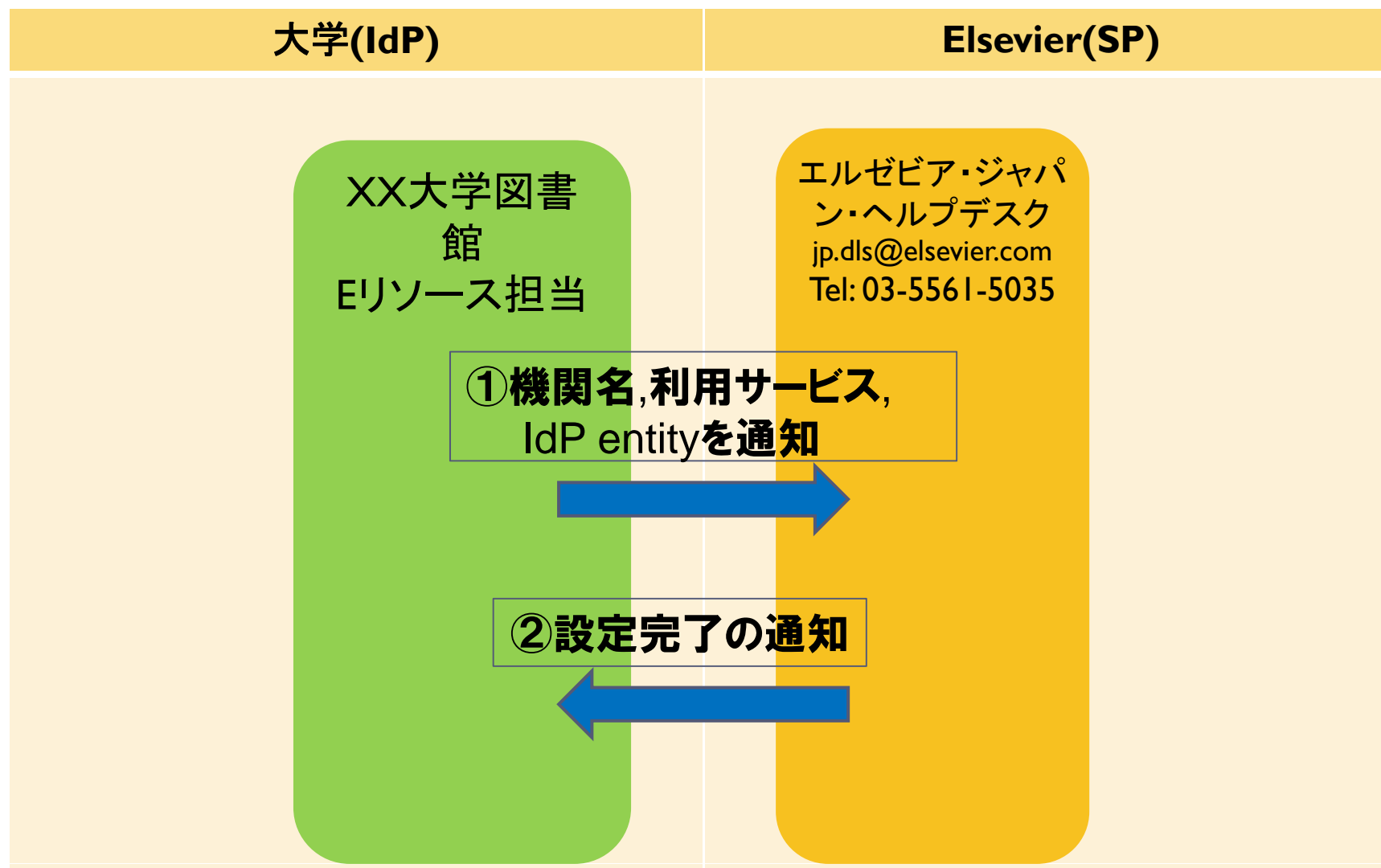
## 接続申請の具体例(5社)

- Elsevier (ScienceDirect, Scopus)
- Ovid (OvidSP)
- Springer (SpringerLink)
- Thomson Reuters (Web of Knowledge, EndNoteWeb)

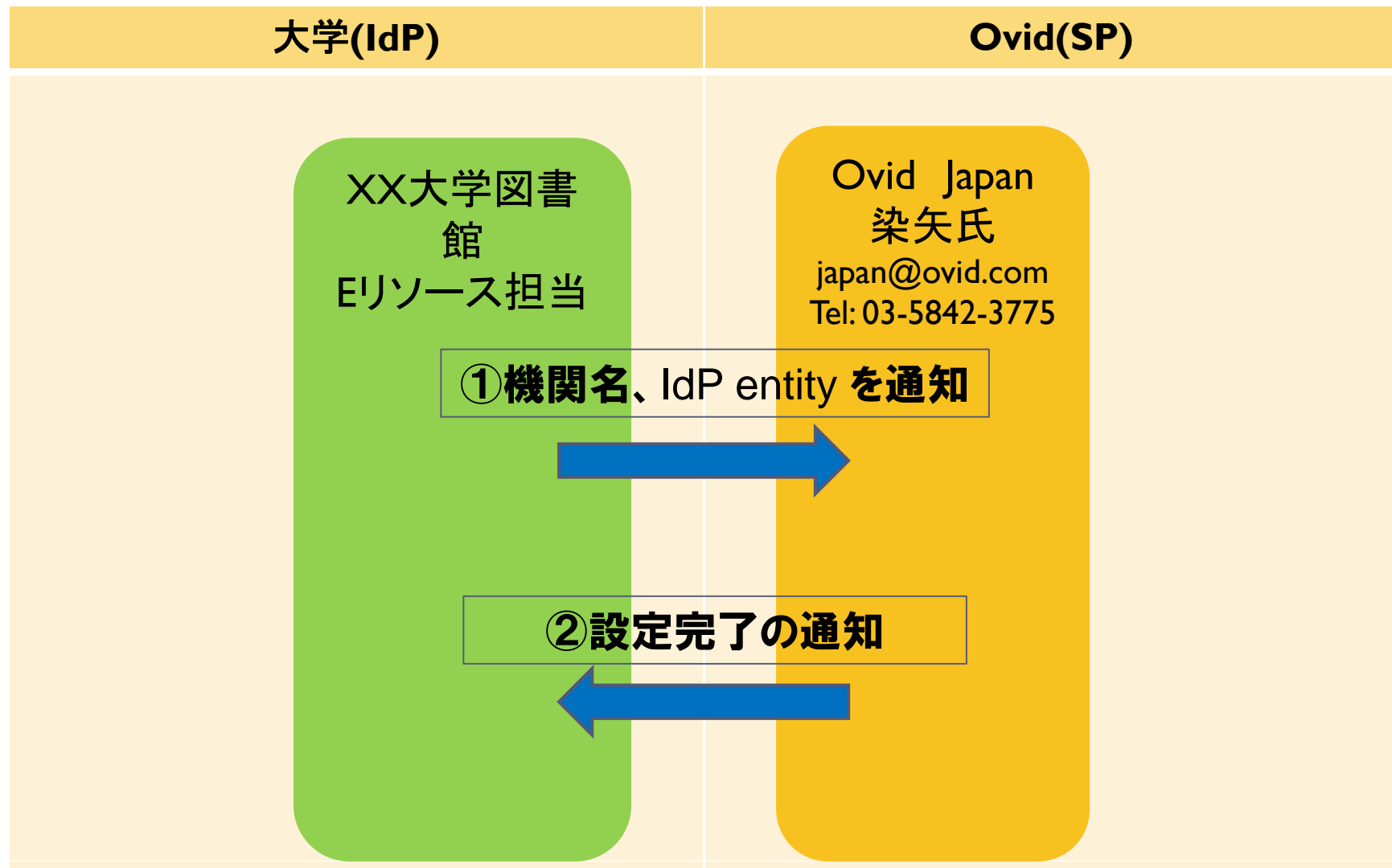
※アルファベット順

- NII (CiNii)

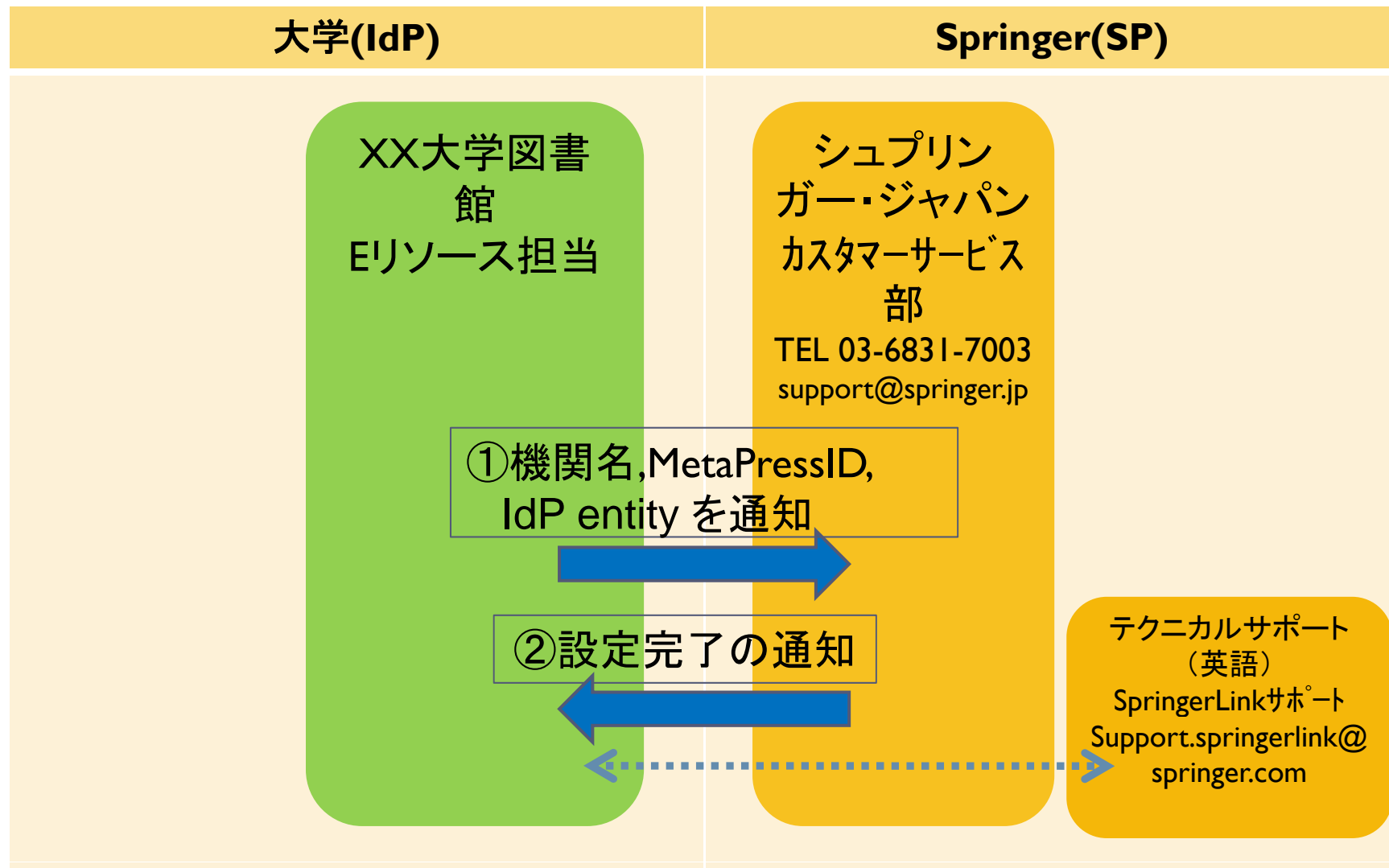
# Elsevier(ScienceDirect,Scopus)の場合



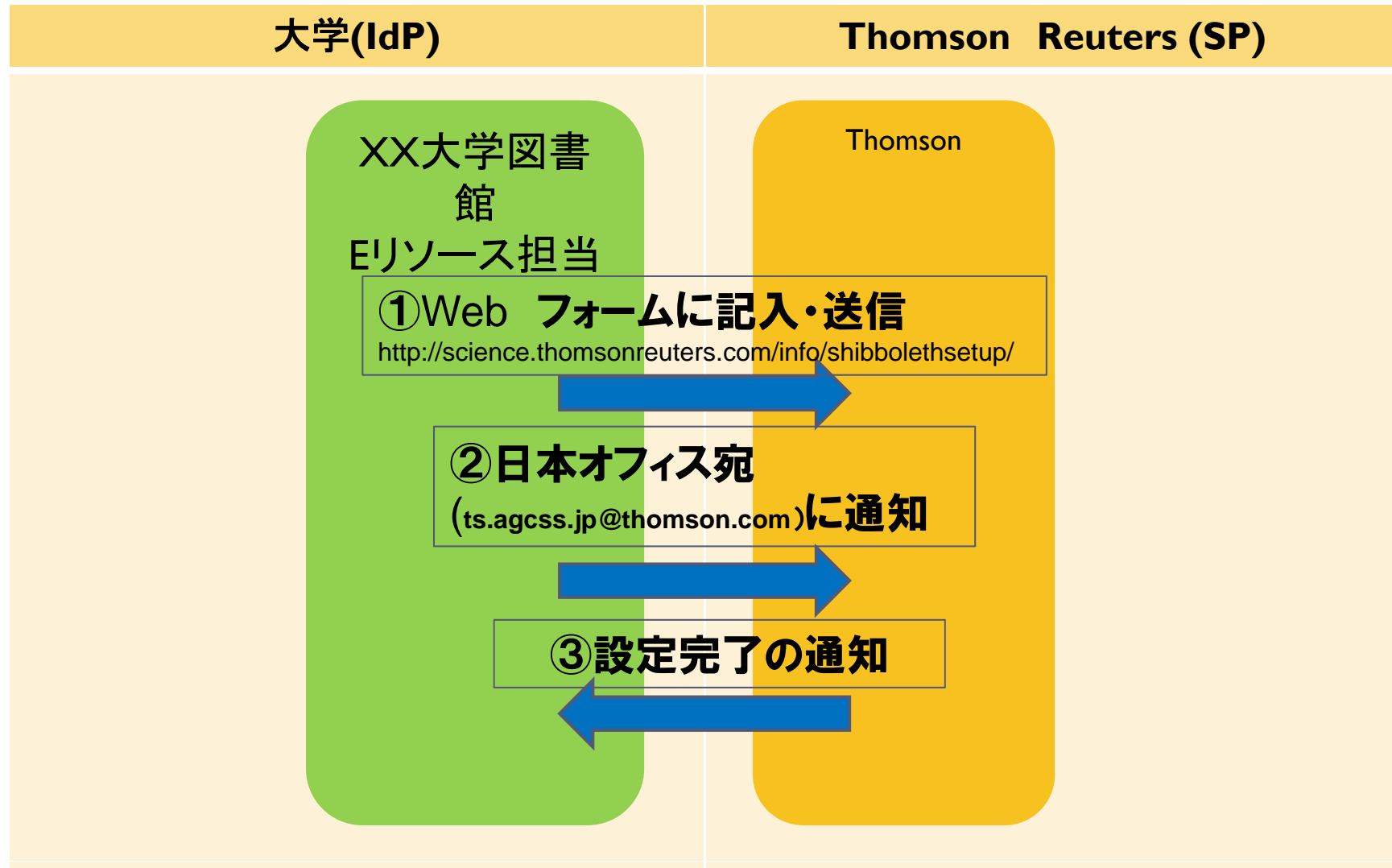
# Ovid(OvidSP)の場合



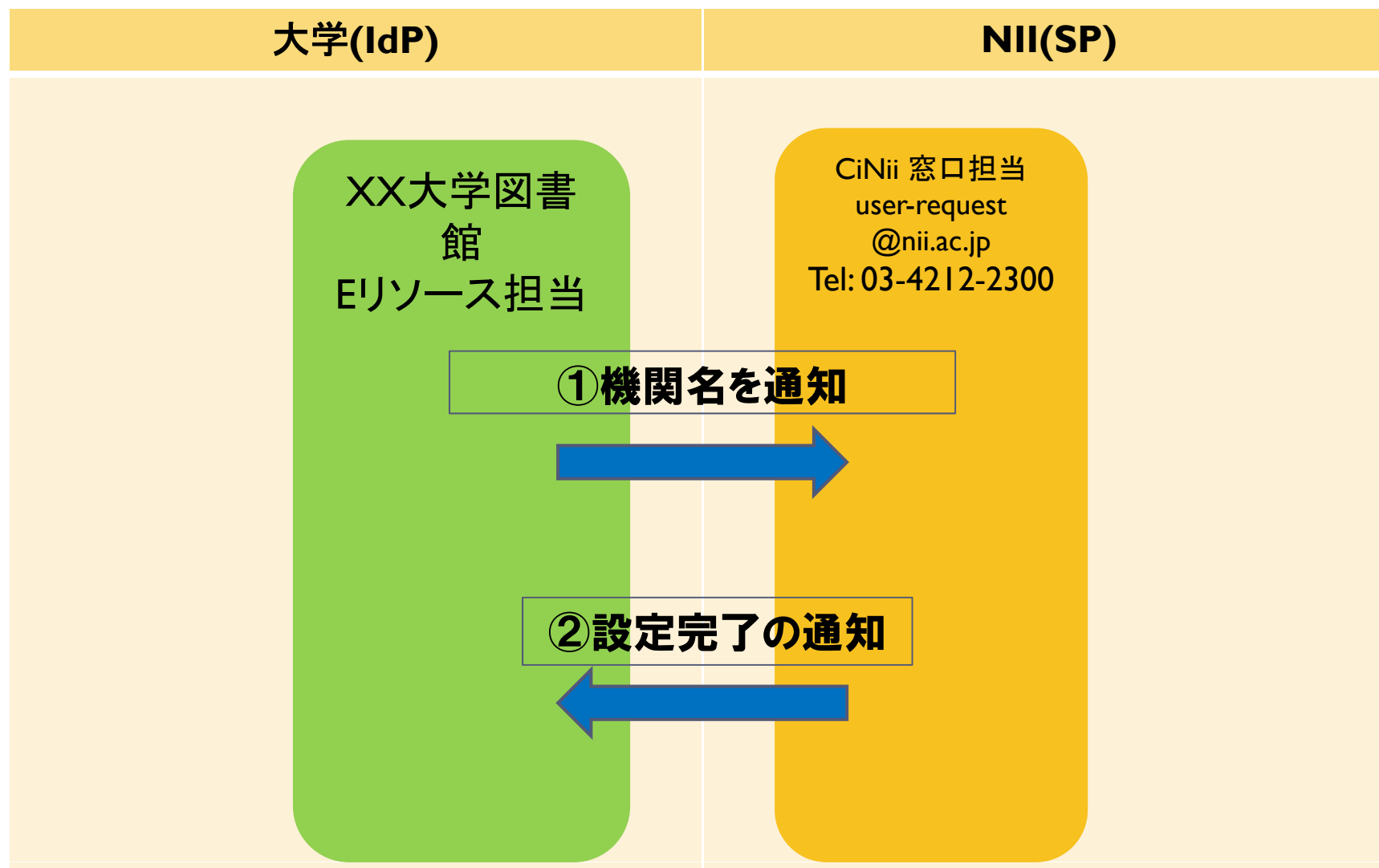
# Springer(SpringerLink)の場合



# Thomson Reuters (Web of Knowledge, EndNoteWeb) の場合



# NII(CiNii)の場合





# テストフェデレーション参加中or参加検討中のベンダ

## (海外)

- Refworks
- EBSCO Knowledge
- CUP

## (国内)

- 医中誌Web
- Japan

etc • • • • •

# 図書館、IdP管理者向けの情報

- <https://upki-portal.nii.ac.jp/docs/fed/technical/connect/sp>
  - 各SPへの接続マニュアルを掲載。
  - フェデレーション参加SPの更新情報をMLで随時告知。
  - ここを見れば、とりあえず全SPへの接続方法がわかる、というページにする。



# 事例紹介

# SSO導入 発展段階論

- (論外) 何もない(リモートIDなし。proxy乱立)
- (0) 何もない(リモートIDあり)
- (1) VPNを利用
- (2) EZproxy等を公認proxyとして利用
- (3) EZproxyをShibのSPとして利用
- (4) Federationに入ってShibでSSO実現

皆さんの大学は今どこまで来た？  
これからどこを目指す？ (4)ですよねモチロン。

## (論外) 何もない(リモートIDなし。proxy乱立)

- とある大規模な某大学
  - リモートID発行は図書館の負担になるので一切やらない。
  - 遠隔利用したければ勝手に研究室でproxy立てて使う。



## (0) 何もない(リモートIDあり)

- 国内の多分100以上の大学
  - 現状維持で十分。
  - (1)が無い。
  - (2)を検討中。
  - (4)を目指す。



## (1) VPNを利用

- 国内の多分10～50程度の大学
  - これで十分だ。
  - ユーザサポートが面倒
  - セキュリティ面の不安
  - (2)を目指す。
  - (4)を目指す。

## (2) EZproxy等を公認proxyとして利用

- 国内のいくつかの大学
  - ユーザエクスペリエンスは確実に向上。
  - 初期導入費用は驚くほど安価
  - 図書館の負担は大
    - 自力構築、各種設定更新、サポートは英語オンリー
  - とりあえずここまで。
  - (3)を目指す。
  - (4)を目指す。





## (3) EZproxyをShibのSPとして利用

- あの大学とあの大学が・・・
  - 次は(4)に進む？

## (4) Federationに入ってShibでSSO実現

- ○○大、○大、NII、、、、
  - みんなのゴールというか出発点。
  - EリソースのSSO以外の用途
    - ・ OPACのマイアカウントで利用
    - ・ IRの登録用アカウントで利用
    - ・ 等々



# ディスクアタッチメント